

14. ばんじょうたにやま5ごうふん 番城谷山5号墳

所在地：越前町天王・宝泉寺

調査原因：範囲確認

調査期間：平成23年8月15日～8月30日

調査主体：越前町教育委員会

調査面積：51.3㎡

時代：古墳時代



位置図（S = 1/50,000）

調査の概要 越前町教育委員会は越前町文化財悉皆調査事業の一環で、番城谷山5号墳の第2次調査を実施しました。平成21年度の測量調査の結果、帆立貝形の前方向後円墳（墳長55m）の可能性を考えました。平成22年度の調査では、古墳周辺に10か所のトレンチを設定し、古墳の形態・規模を把握しました。ただ、西側のくびれ部が明確に検出できなかったため、前方向後円墳の確証までは得られませんでした。今回の調査では、古墳の西側に幅広のトレンチを設定し、くびれ部の検出に努めました。また、後円部径を把握するために、墳頂部に4か所トレンチを設定しました。

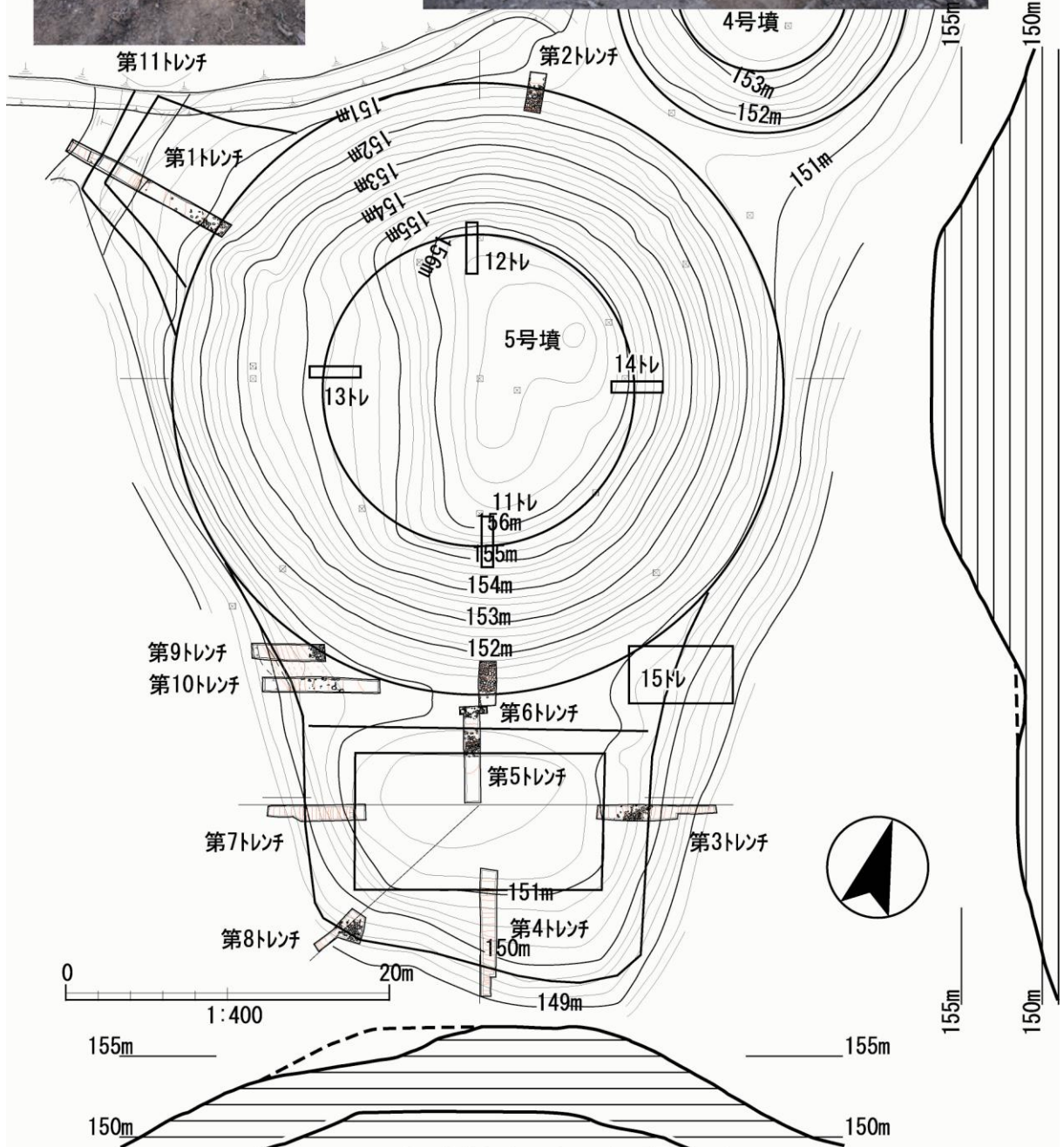
遺構 後世の山城の造成により墳頂部の半分ほどが崩れていたため、13トレンチでは遺構らしきものは発見されませんでした。しかし、11・12トレンチでは埴輪の基底部が残存し、13トレンチでは多くの埴輪が出土したことから、墳頂部にも埴輪がめぐっていたことが判明しました。また、11トレンチの南端の墳丘斜面にかけて川原石が検出されました。後円部の斜面には葺石が存在していたようです。

15トレンチでは円筒埴輪列が後円部をめぐるように検出されました。埴輪列の周辺からは大甕と須恵器の坏・高坏などが出土しました。くびれ部で何らかの祭祀をおこなっていたと考えられます。

遺物 15トレンチでは、多くの円筒埴輪と須恵器などが出土しました。円筒埴輪は朝顔形埴輪の欠片も含まれていました。埴輪の形状などから5世紀中頃につくられたものと考えられます。また、くびれ部からは、高坏などの須恵器約20点と大甕1個体が出土しました。大甕は4世紀末頃の陶質土器の可能性が高いです。須恵器についても、大阪の陶邑産のものも含まれていました。

まとめ 番城谷山5号墳は、丹南地区初となる葺石・埴輪を両方もつ古墳で、試掘調査の結果、帆立貝形の前方向後円墳である可能性が極めて高くなりました。また、多くの須恵器や陶質土器を保有することは、古墳の被葬者にそれだけの権力があつたことを示しています。

（堀 大介）



番城谷山5号墳トレンチ配置図